

種子系ダリアの生育と開花様相に及ぼす品種間差異 ならびには種期と切り戻し方法の影響

Effects of Seeding Time and Cutting Back Pruning on the Growth and Flowering of Dahlia

末 永 由 紀 子
岩 井 彩 子

結 言

ダリア (*Dahlia hybrida* HORT) は花色が豊富で、栄養繁殖の可能な球根植物として扱われている^(6,9)。一方、春まき草花として品種改良も進められた。共に花壇用、鉢物用に用いられている。ダリアを花壇材料に用いる場合、原産地が熱帯高地気候であるために、日本の真夏の高温期には観賞状態を良好に保つことが難しいことが問題となる^(4,6)。そのため茎を切り戻して秋に観賞を期待したり^(2,6,7,10)、は種期をずらして観賞を期待する時期の花壇に用いたりすることがある⁽¹⁾。

ここではまず種子系ダリアの生育と開花様相における品種間差異を調べ、高温期の花壇材料としての適性について検討した。ついで、高温期に比較的開花が安定した品種を選んで、は種期をずらし、さらに切り戻し方法を変えた場合に、生育と開花にどのような影響を及ぼすか、また花壇として観賞価値を良好に保つことが出来るかを検討した。

材料および方法

実験 1. 品種間差異

13品種を供試して、夏期から秋期の開花状況を観察した。

1997年4月7日ピートモス：川砂：パーミキュライトの等量混合土を用い、6 cm のポリエチレンポットには種した。は種から定植までの期間は無加温ガラス室で育苗した。週に一度、液肥 (N : 6.5%、 P_2O_5 : 6.7%、 K_2O : 10%、 MgO : 1%) の1000倍液を灌水代わりに与えた。本葉2節が展開した時に、その上で摘心した。全個体が摘心できる状態になった時に定植した。5月23日に各区約30 cm × 30 cmの間隔で3株 × 3株の計9株を定植した。同時に尿素入りIB化成肥料 (N : 10%、 P_2O_5 : 10%、 K_2O : 10%、 MgO : 1%) を1㎡あたり100 g 施した。その後、月一度同肥料を100 g ずつ与えた。

最外部の舌状花が平らになった時を開花とした。舌状花が三分の一以上変色している花を観賞価値がなくなったとし除去した。調査日において、開花中でなおかつ観賞価値があると認められる花数 (当日着花数) を調べた。さらに、各調査日間の開花数 (週間開花数) を調べた。実験は株の傷みが激しくなった10月28日に打ち切った。

実験2. は種時期と切り戻しの影響

実験1の結果から、供試品種中で各時期における当日着花数が比較的多く、開花が長期間安定していた‘サニーローズ’を供試した。

は種は1998年4月18日から20日ごとに6月28日区まで設けた。同時に、4月18日まきの区において花の観賞価値がなくなった時に他のは種日と同様に花だけを除去した区(1区)、花の下2節を含めて切り戻した区(2区)、花の茎基部2節を残して切り戻した区(3区)を設けた。は種および育苗は実験1と同様に行った。1区9株で内寸18cm×60cm、深さ15cmのプランターに3株定植した。栽培は実験1に準じた。ただし、施肥は1回につきプランター当たり50gずつとした。実験は10月21日まで行った。

調査は実験1に準じた。

結 果

実験1. 品種間差異

第1図に当日着花数すなわち調査当日に開花していて、なおかつ観賞価値のある花数を示した。供試品種中で早くから枯死株がでるものがあった。その中で‘サニーローズ’、‘サニーエロー’、‘ハーレークイーン’、‘アンウィン’は実験終了の10月28日まで全株生存した。株当たりの当日開花数は7月下旬から9月下旬にかけて‘サニーエロー’は2～3花、‘ハーレークイーン’は2～5花、‘アンウィン’は3～5花であった。しかし、全品種とも9月上旬にはほとんどの株にウドンコ病が発生していた。また、‘アンウィン’は草姿が乱れた。先述の4品種の中で‘サニーローズ’が開花開始から実験終了まで当日開花数が多く保たれ、7月下旬から9月下旬まで5花以上だったのに対し、他の品種は5花以上の日は長く続かなかった。

各調査日間の開花数(週間開花数)を第2図に示した。7月下旬から9月下旬にかけて、‘サニーエロー’は2～7花、‘ハーレークイーン’は3～12花、‘アンウィン’は2～6花の週間開花数であった。‘サニーローズ’は5～16花と他の品種より週間開花数が多く保たれた。

実験2. は種期ならびに切り戻しの影響

1) は種日の影響

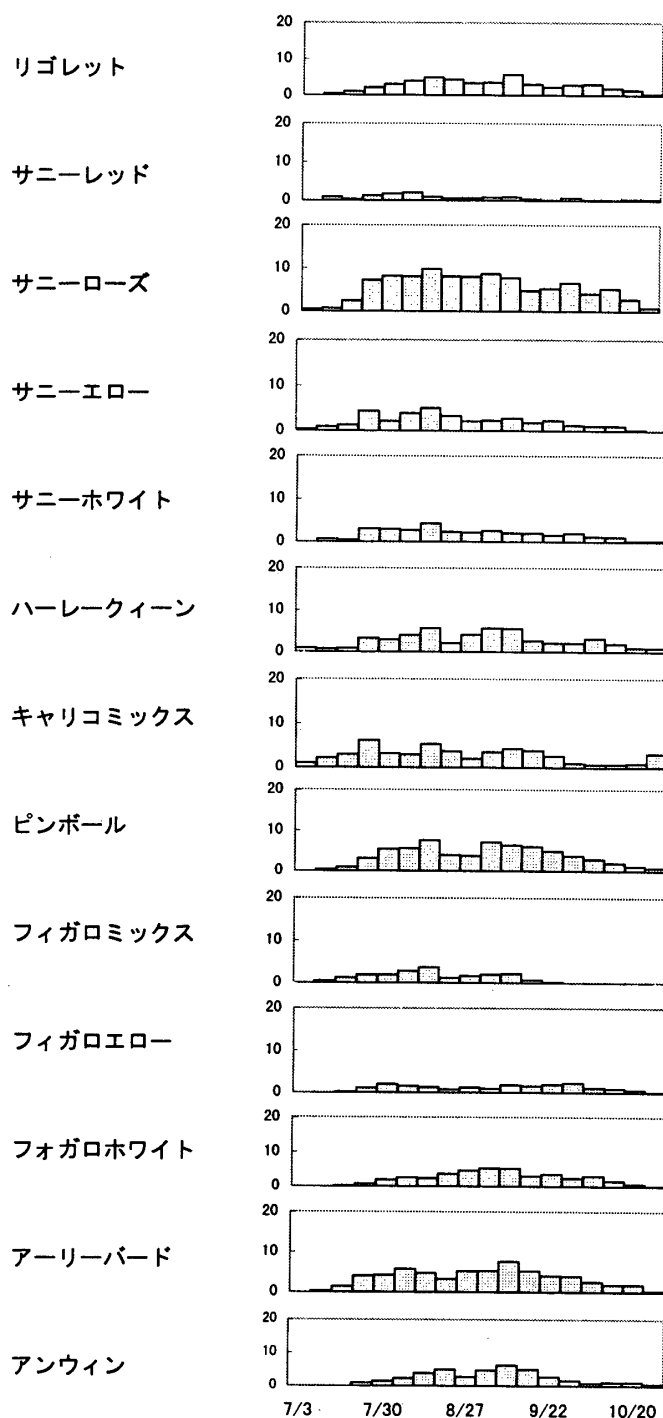
第1花の開花日はは種が早いほど早く、4月18日まきで7月4日であった。到花日数は5月8日まきの74日から6月18日まきの86日の範囲であった。

当日着花数すなわち各調査日において開花中で観賞価値があると認められる花数を第3図に示した。実験1では当日着花数が株当たり10花以上になることはなかったが、実験2では最初の開花から2週目に10花以上になった。早くは種した区ほど早く着花数が多くなった。4月18日まきは7月4日より開花し、7月10日に10花以上になり、10月中旬まで続いた。5月8日まきは7月21日より開花し、7月31日より9月下旬まで10花以上着生していた。5月28日まきは8月14日より開花し、8月下旬から9月下旬まで10花以上であった。6月18日まきは9月12日より開花し、10月下旬まで、

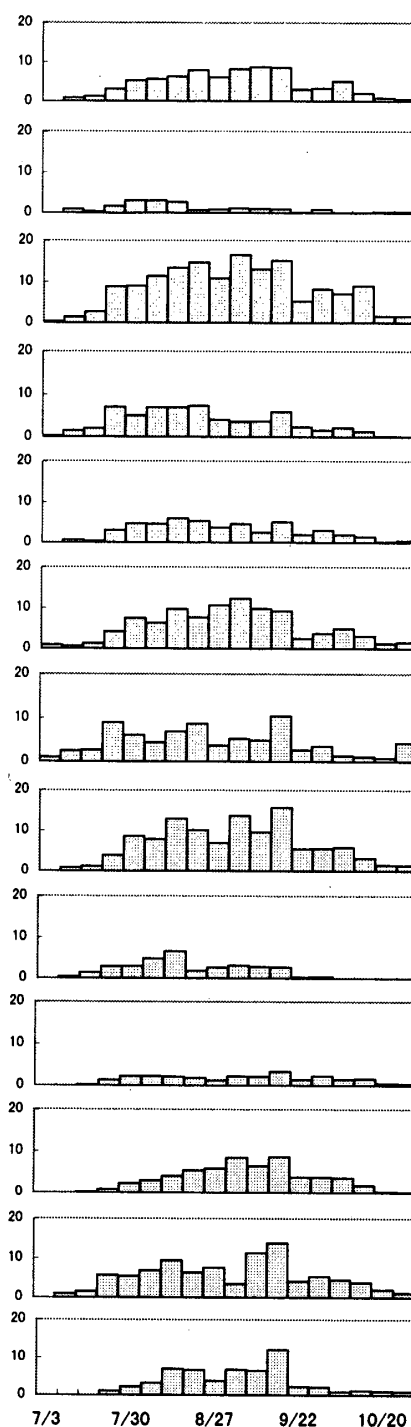
種子系ダリアの生育と開花様相に及ぼす品種間差異ならびには種期と切り戻し方法の影響

6月28日まきは9月17日開花で9月下旬から10月上旬まで10花以上の期間が続いた。

各週ごとの週間開花数を第4図に示した。4月18日まきは7月中旬から10月中旬まで、5月8日まきは7月下旬から9月下旬まで、5月28日まきは8月中旬から9月下旬まで、6月18日まきは9月中旬から10月下旬、6月28日まきは9月下旬から10月上旬を除き中旬まで10花以上となった。4月18日まきが最も多く、早くは種した区ほど早く開花数が多くなった。

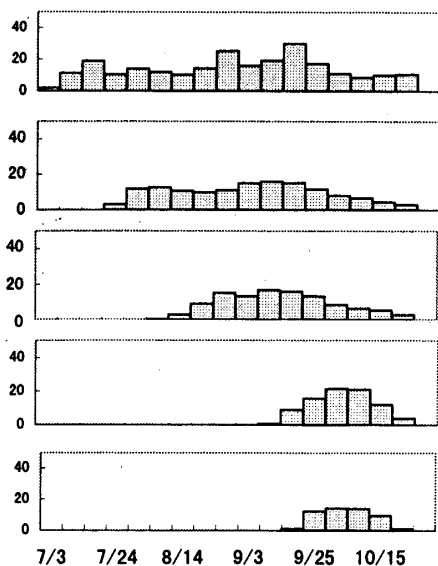


第1図 ダリア品種別当日着花数
縦軸：1株当たりの花数

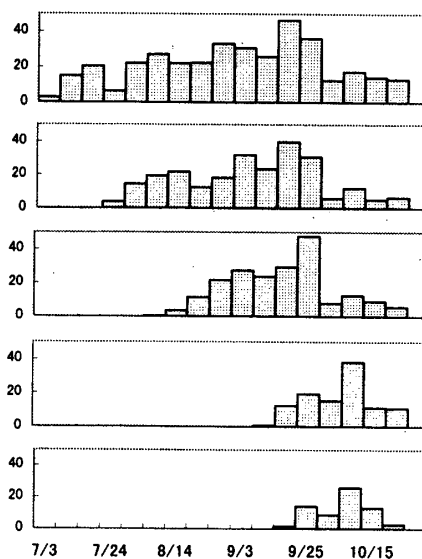


第2図 ダリア品種別週間開花数
縦軸：1株当たりの花数

末永 由紀子・岩井 彩子



第3図 ダリア‘サニーローズ’の当日開花数に及ぼすは種時期の影響
 は種：上から4月18日、5月8日、5月28日、6月18日、6月28日
 縦軸：1株当たりの花数



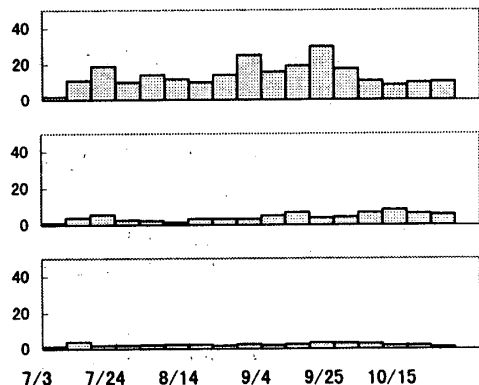
第4図 ダリア‘サニーローズ’の週間開花に及ぼすは種時期の影響
 は種：上から4月18日、5月8日、5月28日、6月18日、6月28日
 縦軸：1株当たりの花数

2) 切り戻しの影響

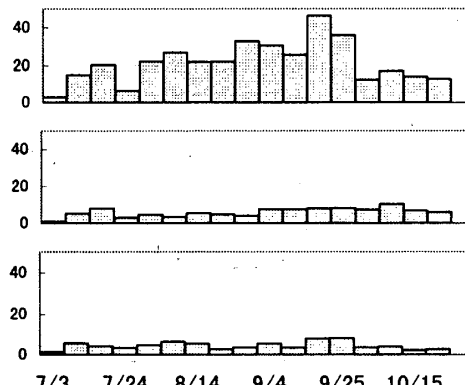
第5図に1株当たりの当日着花数を示した。1区（花だけ除去した区）は長期間10花以上保たれた。2区（花下2節で切り戻した区）は9月から10月にかけて当日開花数が増加し5花以上の日が多くあった。3区（花の茎2節を残して切り戻した区）は1花から3花の状況が続いた。

第6図に1株当たりの週間開花数を示した。1区は7月下旬から9月下旬までは1週間に20花以上開花した。2区は8月中旬から5花以上開花し、9月から10月にかけて7花から10花に増加した。3区は7月下旬から8月中旬に5花以上になり、9月上旬少し減少し、9月中旬から下旬にかけて5花以上になった。

は種日および切り戻し方法が異なる区の1株当たりの最終的な累積開花数は、4月18日まき（1区）が最も多く約360花で、5月18日まきは約250花、5月28日まきは約200花、6月18日まきは約100花、6月28日まきは約50花であった。4月18日まきの切り戻しをした2つの区は累積開花数が1区より少なく約70~100花であった。



第5図 ダリア‘サニーローズ’の当日開花数の及ぼす切り戻しの深さの影響
 上より1区、2区、3区 縦軸：1株当たりの花数

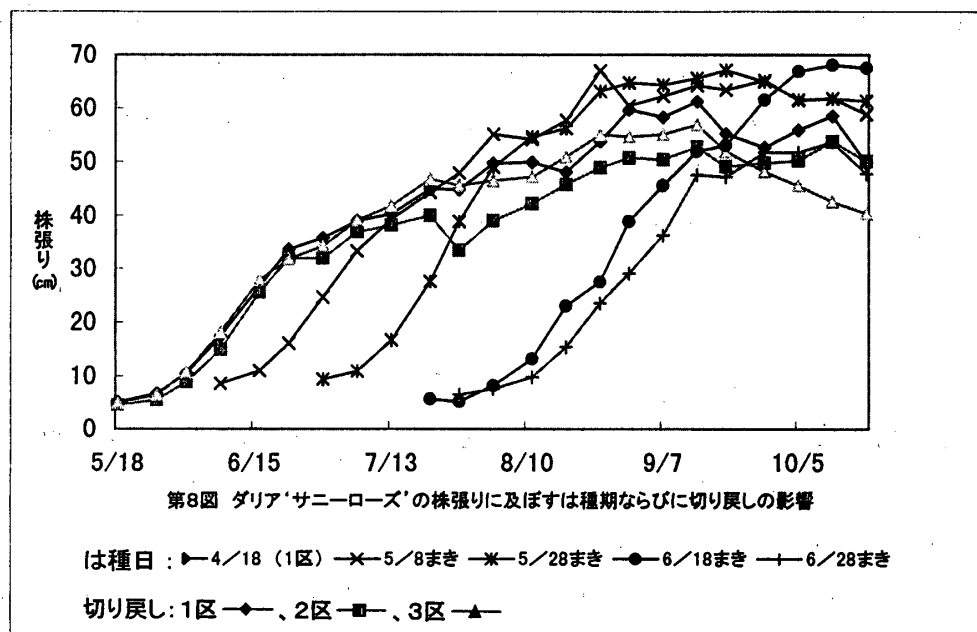
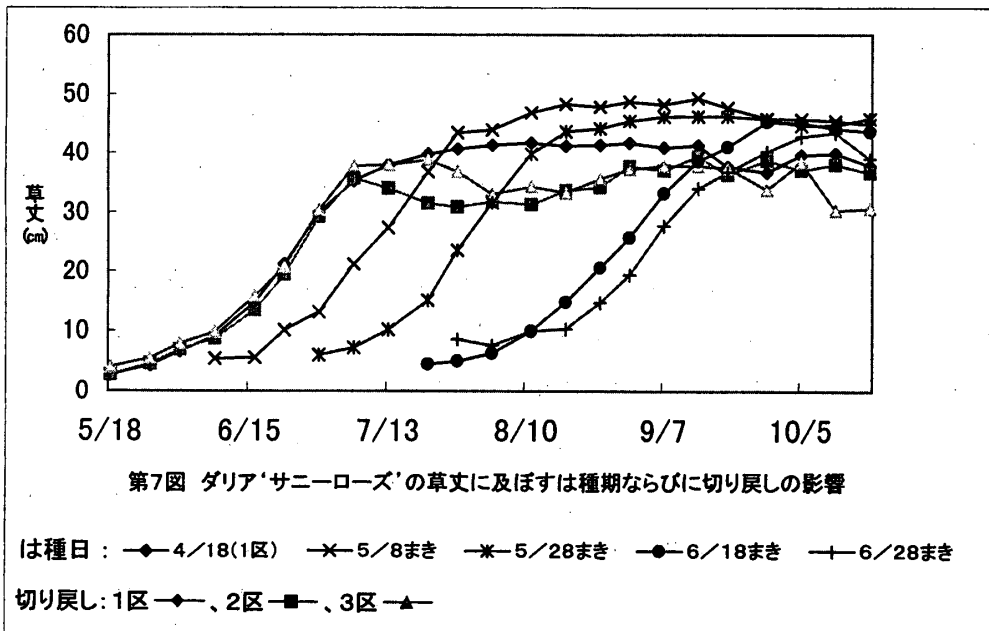


第6図 ダリア‘サニーローズ’の週間開花に及ぼす切り戻しの深さの影響
 上より1区、2区、3区 縦軸：1株当たりの花数

種子系ダリアの生育と開花様相に及ぼす品種間差異ならびには種期と切り戻し方法の影響

第7図と8図に1株当たりの草丈と株張りを示した。どの種期も草丈が40cm 前後まで伸長して、その後は緩慢になり50cmとなり、9月下旬以後は低くなった。

株張りは50cm 前後まで生育し、その後緩やかな生育となり最終的には60~65cm となった。6月まきを除いて9月下旬から株張りは小さくなった。9月中旬の台風によって枝折れが生じ草姿が乱れたが、4月まきの切り戻しを行った区は台風の影響をあまり受けなかった。



末 永 由紀子・岩 井 彩 子

考 察

著者ら⁽⁵⁾は、ジニアにおいて当日着花数が2花程度以上になれば観賞的に良好であると判断した。種子系ダリアでも草姿と花の大きさからこの基準が適用できると考えられる。本実験ではすべての品種と区においてこの基準を上まわることが多かった。そこで、より観賞上好ましいものを実験1において供試した13品種の中から選ぶと、‘サニーローズ’は高温期に多く開花し、夏から秋の花壇において観賞価値が良好に保たれた。

以上の結果から‘サニーローズ’を用いて、は種期と切り戻し方法を変えて観賞上花壇として好ましく保たれるかを検討した。

4月18日から20日ごとには種した場合、は種時期が早いほど花壇として観賞価値が高く保たれた。4月18日まきから5月28日まきまでは真夏の高温期も着花状況は良好に保たれた。は種から開花までは74日から86日要したが、早いのは種ほど早く開花し花壇の状態が良好に保たれた。ダリアが短日直物であること^(2,3,4,7,8)から、6月以後のは種では開花が抑制され、開花日が遅れるであろうから⁽⁸⁾、それらの区において観賞期間が秋に限られることとなったのであろう。

切り戻し方法を変えた場合には、各区に大きな差が生じた。すなわち観賞価値が無くなった花のみ除去した1区においては当日着花数や週間開花数は多く保たれたが、8月下旬より衰弱した。これは早くから多数の花が咲き続け株への負担が大きくなったためと考えられる^(2,4,6,10)。花下2節で切り戻した2区は9月上旬より5花以上の当日着花数を保ち続け、観賞上良好な状態を保てることが明らかになった。茎基部2節を残し切り戻した3区では1～3花の当日着花数を保ち続けたが、草丈と株張りは他の区より劣った。この整枝方法はダリアの夏の切り戻し管理として一般的^(2,7,8,10)だが、切り戻しが強く花壇として管理するにはダリアの観賞価値を低下させると思われる。長期間観賞状態が良好に保たれた5月まきの株では、開花期間中、草丈は40cm程度、株張りは50cm程度を保ち続けていた。供試品種がわい性であることを考えると、ダリア花壇として十分な株の生育が保たれたといえる。4月まきでは時期により高低差が生じたり、長期間開花を保つため株に負担がかかり、夏の高温が障害となり^(2,6,7,10)、株が衰弱し、草丈と株張りに影響を及ぼす結果になったと考えられる。は種期を少しずらすことで盛夏の花壇でも株の生育を良好に保てる⁽¹⁾と考えられる。

摘 要

1. ダリア13品種において、当日着花数の着生状況から、長期間観賞状態が良好に保てる品種があることが明らかになった。特に‘サニーローズ’は4月中旬には種すると7月上旬から10月下旬までの長期間観賞状態が良好に保たれた。
2. ‘サニーローズ’を供試し、4月中旬から6月下旬まで20日ごとには種した結果、は種期が早いほど、早期から観賞状態が良好になった。しかし、4月上旬まきでは9月上旬より病気株が発生しその後の株の生育が劣った。5月18日まきは当日着花数も比較的長期間保ち、株の生育も良好に保たれた。

種子系ダリアの生育と開花様相に及ぼす品種間差異ならびには種期と切り戻し方法の影響

3. 花の下2節で切り戻した区では花数は花だけ除去した区より少ないが、夏期中も開花を絶やさず、9月上旬以後一層観賞上良好な状況になった。

謝 辞

名城大学農学部の土屋照二教授にはご指導とご協力をいただき、感謝の意を表す。

参考文献

1. 阿部定夫・岡田正順・小西国義・樋口春三・1986. ダリア. 「花卉園芸の事典」. pp264-269朝倉書店. 東京.
2. 稲葉久仁雄. 1995. ダリア. 「花卉園芸」. pp158-162. 文永堂出版. 東京.
3. 小西国義. 1982. 短日植物. 「植物の生長と発育」. p 124. 養賢堂. 東京.
4. 小西国義. 今西英雄. 五井正憲. 1988. ダリア. . 「花卉の開花調節」. pp179-185. 養賢堂. 東京.
5. 末永由紀子・岩井彩子. 1995. ジニアの生育と開花に及ぼすは種期の影響 北陸学院短期大学紀要. 第27号 : pp247-254
6. 中村紀子. 1997. ダリア. pp30-31. 園芸新知識. 雑種苗. 京都.
7. 奥村実義. 1985. ダリア. 「朝日園芸百科11」 pp52-58. 朝日新聞社. 東京.
8. 塚本洋太郎. 1978. ダリアの日長反応. 「花卉総論」. pp353-354. 養賢堂. 東京.
9. 鶴島久雄. 1988. ダリア. 「花卉園芸ハンドブック」. pp598-604. 養賢堂. 東京.
10. 安田 勲. 1976. ダリア. 「花壇作りと花卉栽培」. pp372-378. 養賢堂. 東京.